

令和5年度 八坂小中学校運営方針

1 八坂小中学校 経営ビジョン

【目指す人間像】 「自分が好き」と言える子ども
～自己有用感の育成～

【教育理念】 「広げ、深め、高め合う」学校

【学校教育目標】 「問い」をもって学ぶ八坂の子

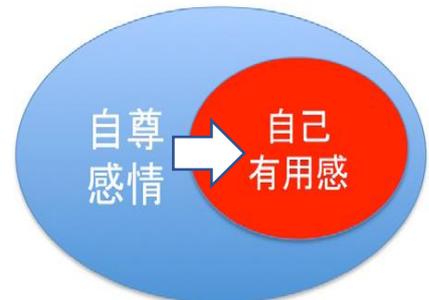
【目指す人間像】 「自分が好き」と言える子ども 自己有用感の育成
～ 義務一貫教育9年間で育てる姿 ～

「自分が好き」と言える「自己有用感」は、社会性の基礎となるものです。人の役に立った、人から感謝された、人から認められた、という「自己有用感」は、自分と他者（集団や社会）との関係を自他共に肯定的に受け入れられることで生まれ、社会生活の基盤となるため、現行の小中学校の学習指導要領にも、異年齢集団等による「交流活動」の重要性が盛り込まれています。

「人とかかわりたい」と思う気持ちは、自らの体験によって獲得されます。他の子どもと一緒に遊んだり、活動したりすることを通して、「人とかかわることって楽しい」「人とかかわることって苦痛なことではない」と感じるころから「人とのかかわり」は始まります。それが、「社会性の基礎」を形作っていくと考えられています。「自己有用感」は、他人の役に立った、他人に喜んでもらった等、相手の存在なしには生まれてきません。

そこで、義務一貫教育前期課程では、「人とかかわることが好き」ということ、集団活動に進んで参加できることを通して自尊感情の基盤を構築し、さらに義務一貫教育後期課程になるにつれ、そうしたかかわりを通して、進んで協力できた、自分から働きかけができた、誰かの役に立つことができた、という集団の一員としての自信や誇り（自己有用感）の獲得を目指します。

「学び合いの里 八坂」と共に歩む学校づくりのもと、子どもの多様性や個性をまるごと包みこみながら、「問い」をもって物事の本質を探究し協働しながら学び合う授業実践を中核として、「自分が好き」と言える子どもの育成を目指します。



【教育理念】 「広げ、深め、高め合う」学校

～「対話的な学び」を根幹とする学校 「多様性・個性」を包みこむ学校～

新学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程の実現」が重要視されています。昭和51年に全国初となる山村留学生の受け入れを開始した八坂地区は、平成27年に「文科型コミュニティ・スクール」となり、学校運営協議会制度にもとづく学校づくりを進め、地域と学校が一体となり地域の願いや地域の活性化の一助としての側面を大切にしながら、子どもの育成及び学校経営を行ってきました。

さらに、近年では「授業を根幹とした学校づくり」を学校と地域が共有し、八坂小中学校共に協働的な授業づくりを進めてきました。その結果、「教える教師からの脱却」へと教職員の授業観が変容し、子ども達は友と知恵を出し合い問題を解決することに喜びを感じつつあります。

このような経過を踏まえ、令和元年度の学校運営協議会では「学び合いの里 八坂」を合言葉に、学校と地域が協働しながら小中一貫教育（八坂オリジナルな教育）を創造し、子どもも大人も共に、「協働する力」や「自己有用感」をさらに伸ばして学び合うことを決意しました。

さらに、令和5年度からは八坂小中学校の教育理念を『「広げ、深め、高め合う」学校』とし、「協働する力」と「自己有用感」を育むための義務教育9年間の教育課程を編成し、子どもたちが新しい時代を生き抜く力の育成を目指します。

※「対話的」な学びとは・・・

身に付けた知識や技能を定着させるとともに、物事の多面的で深い理解に至るためには、多様な表現を通じて、教職員と子供や、子供同士が対話し、それによって思考を広げ深めていくことが求められる。そのような「対話的な学び」の実現に向けて、例えば、子供同士、子供と教職員、子供と地域の人が、互いの知見や考えを伝え合ったり議論したり協働したりすることや、本を通して作者の考えに触れ自分の考えに生かすことなどを通して、互いの知見や考えを広げたり、深めたり、高めたりする言語活動を行う学習場面を計画的に設けること。

【学校教育目標】 「問い」をもって学ぶ八坂の子

～ICTの有効活用による学び合いの質的向上を図る～

八坂小中学校では、6・3制を基本とした施設分離型の環境を生かし、発達段階に配慮したカリキュラムを開発して学校づくりを行い、9年間の学びをつなげます。

まず、「授業を根幹とした学校づくり」の具現に向け、『問い』をもって学ぶ八坂の子」を学校教育目標とし、子どもたちが興味関心を高め、追究意欲を喚起するような事象・対象との出会いから、自ら問題意識（「問い」や「願い」）をもち、追究する問題（「学習問題」）を明確にした授業づくりを目指します。

また、ICTの活用により各自の問いや考えをリアルタイムで共有して対話を活性化させたり、データ蓄積により自分の考えの深まりを評価したりするなどの活動を積極的に取り入れます。そのために、1～6年（前期）では末端機器を操作する力を身に付け、7～9年（後期）では、前期での経験を生かした協働作業等、新たな価値を創造するための学習の場を設定していきます。

さらに、八坂小中学校では、施設分離型から生じる「ICT活用の必要性」を利点ととらえて、オンラインによる教科担任制の授業や小中合同職員会及び職員研修等を日常的に行います。

21世紀を生きる子ども達が学び続け、より良い人生を送るためにはICTの活用は必要不可欠です。今、文科省のGIGAスクール構想により教育現場では一人一台タブレットを活用する時代が訪れました。ここ八坂がICT活用の先進地となり、多くの子どもが最先端の教育を享受して育つことを目指します。

＜八坂オリジナルな教育の一例 ～6年理科「魚の体のつくりと働き（解剖）」から～＞

※八坂オリジナルな教育とは・・・

一貫校・小規模校の利点を最大限生かし、体験から学ぶ、地域・自然から学ぶ、地域講師から学ぶ、交流活動から学ぶ、学習支援ボランティアから学ぶ、八坂のよさ・伝統文化から学ぶ、多様な見方・考え方から学ぶ等の「アナログ・リアル」と、「ICT・デジタル」を融合かつ最適に組合せた教育。



- 「アナログ・リアル」と「ICT・デジタル」の融合
- ICT（一人1台端末）の有効活用
学びの足跡、情報共有
- 兼務教員の活用
- 地域素材の活用
- 伝統文化の活用
- 地域ボランティア人材の支援・活用
- 山村留学生・特認校生の受入れ 多様性から学ぶ

※ICT：情報通信技術（Information and Communication Technology の略）

※GIGAスクール構想：2019 文科省 小中学生に一人一台の端末を配布⇒ デジタル化対応環境整備